

海賊対策の陰で深刻化

ソマリア沖海賊対策で海上自衛隊がP3C哨戒機の活動拠点を置くアフリカ東部ジブチで、隣国ソマリア情勢の悪化を受け流入する「新難民」が急増している。現地では活動する支援団体「AMD A社会開発機構」(本部・岡山市)は、国際協力が進む海賊対策の陰で深刻化する難民問題への支援を訴えている。



■ 海自拠点の隣国ジブチ ■

P3Cの活動拠点のジブチ空港に近いAMD Aジブチ事務所。5月下旬、南西へ車で約2時間のアリアダ難民キャンプから、病気の診療を求めソマリア難民数十人が集まってきていた。キャンプの食料不足などでみな疲れ果てた様子。肩に銃創が残るユスフ・イブラヒムさん(42)は「5歳の息子が栄養失調なんだ」とやせた体で訴えた。同事務所の村上久子プロジェクト・マネジャーによると、国内で唯一の難民キャンプである同キャンプはソマリア内戦が悪化した1990年代から難民約6千人が居住。イスラム原理主義勢力の拡大で2008年から難民が増加、09年初めには約9千人に達した。同事務所はキャンプ内での治療やジブチ市への救急搬送をしているが、7月の患者数は今年初めの2倍に相当す

ソマリア難民急増

る1日約40人に急増。医師不足に加え、酷暑の屋外で待つ難民も増え、対応は限界に近づいている。ソマリアでは5月に急進的イスラム組織アッシャバーブと暫定政府軍の戦闘が激化しており、今後も難民流入が続く恐れもある。紅海に面したジブチには海賊対策で自衛隊や米軍、欧州連合(EU)など各国部隊が集まる。村上さんは「ソマリアの危機的状況から海賊や難民問題が生じている。ジブチへの国際的な注目をきっかけに、難民問題にも関心が向いていければ」と期待している。

(ジブチ市共同＝高山裕康)

ジブチのAMD A社会開発機構事務所の敷地で診療を待つソマリア難民(5月末)(共同)

食料不足、治療…対応は限界

AMD A 支援訴え